「マラリア」療法に對し、ブラウト、スタイネルの回歸熱療法、鼠咬症「スピロヘータ」療法等は「マラリア」療法に劣る樣であります。「マラリア」療法を二期三期等の皮膚黴毒に用ふるが如きは尙ほ問題でありまして、之によつて麻痺狂を豫防とせんとするが如きは反證（キルシュバウム、カルテンバッハ）もある事であつて餘り深入りしすぎた感が致します。

尙ほ神經系黴毒、殊に「メクルエス」の豫防に就て一言致します。先天黴毒兒寛の一・五％（バンカー、ヘンリー）乃至二％は、幼年性麻痺性擬呆に罹ると云ひますが、先天黴毒兒の乳兒期には六六・七％（アアマン）良性黴毒性腦脊髄膜炎があり、脊髄液のワ氏反應陽性は三〇％でありますが、年長するに從ひ減少して十七歳以下晩期先天黴毒では病的脊髄液二二・六％（ペトロウ）乃至一六・九％（アアマン）となり、脊髄液ワ氏反應陽性は一〇％（キヤンノン）又は七・五％（ペトロウ）となります。

又皮膚黴毒でも第二期以後二三乃至五〇％内外に脊髄液ワ氏反應陽性でありますが、之等陽性脊髄液が必ず後に「メクルエス」を招來するやは疑問であつて、ノンネ等は黴毒早期の脊髄液陽性なのは豫後判定の意味なしと云ひ後に治療なくして自然治癒するを述べ、治療後も直ぐにワ氏反應を檢しては豫後の判定に意味なく數ケ月の後又はワ氏反應誘發法を行つて後檢すべきであると云つて居る人もあります。

表面に表はれた黴毒症候を除くと共に血液及脊髄液を健康ならしむる事は黴毒治療の目的であるとしまするも、今日の醫學で適當なる治療法を行つても尙ほ陽性脊髄液を有する者が少くありませぬ。然も斯る例にて數年月中には自然に治療なくして陰性となり得るのであります。又一度脊髄液が健全になつても後に神經黴毒を招來する危險がないわけではありませぬ（ノンネ、オラーリー）。オラーリーは初より脊髄液の陰性なる神經黴毒及び治療後脊髄液陰性となつた神經黴毒が然も尙ほ症候進行し又は初めて發現するもありと云ひ、ストークス、デスプリゼーも治療後脊髄液健全となつたものの七・五％は、尙ほ症候的に進行性なるを述べて居ります。之等より見るに脊髄液のワ氏反應は診斷には重要でありますが、之れを根據として豫後を判定し且つ之れを標的として治療せんとするは誤りであらうかと考へます。

驅黴劑を集めましたから後に御覽を願ひます。終りに臨み會長、座長に敬意を表し、御清聽を煩はした諸君に感謝致します。

—（第廿七回日本神經學會宿題報告）—

說苑

國際聯盟に於ける性病

豫防事業（上）

法學博士
農學博士
新渡戸稻造

序言

私は此の年になつて、未だ花柳病に罹患した經驗がない。隨つて花柳病共のものに就ての感じが鈍く、玆に御話し申し上げる資格が無い。黴毒はコロンブスが米大陸發見の際、其の地から歐洲大陸へ移植し傳播したものであるとの事であるが、歐洲の各國は、其の傳播系統に就いて相互に讓り合つて、スペインでは之を伊太利病と稱し、伊太利では此れをスペイン病と呼び、他國も同然、外國名を附してゐる。又た其の豫防のサツクを佛國では之を英國書幹と呼べば、英國では之を佛蘭西書幹と云ふ。斯う云ふものを國民外交とでもいふか、兎に角國際的に性病が重要なる位置を占有してゐる事は判る。僅かに此の性病の豫防が國際性を帶びてゐるといふ點を私は今日國際聯盟の保健方面に於ける活動に就いて暫時御清聽を煩したい。

聯盟創業時代の苦心

一體國際聯盟の主なる目的は、云ふ迄もなく戰爭防止としてあるが、戰爭防止丈けでは平時には殆んど意味をなさぬ。故に戰爭防止の方法として國際的協力を平時怠らぬことに主きを置き、凡ゆる方面に、國際聯盟は各國間の協調とでもいふか、協力に努めてゐる。各方面と云ふうちにも、此の性病に就いて御承知の通り、保健衛生、或は惡疫の豫防の方面に就いても、協力するのが、最も有益にして且つ手を下すに易き事なのである。

此の事に就いて自分の恥を曝して申し上げると、國際聯盟なるものが初めて創立された九年前、私も聯盟の事務局の一員に任命された。其の時には如何なることを怎うするか一定の職務章程が樹つて居らなかつた。然るに——此の問題に就いては後に詳細に述べるつもりであるが——創立されて二ケ月も經過せぬうちに、人類の保健に就いて、殊に疫病の豫防といふ、大いに急を要する問題が突發した。玆に於いて如何なる方法をもつて國際的協力を成し遂げるかといふ問題が起つた。而して如何なる因果か私が此の問題に關與しなければならぬ事になつて居つたのである。

此の問題に關する書類が事務局に廻附されて來た。就ては私が何か意見書を添付しなければならぬ。故に大急ぎで——恰度其の頃は倫敦に聯盟事務局があつた——British museum に行つて毎日々々朝から晩迄、參考として書籍を漁つた。ところが三十餘年前から御承知の通り國際的衛生會議——第一回一八九二年（明治二十五年）——なるものが屢々會合されてゐるので、其の報告等を持ち出して、幾何程度迄保健に關して國際協力が行はれたるかを溫ねたところが、年々此の種の會合が增加して來て、而かもそれ相應に効果を擧げてゐることが判明したので、巴里に常置してある Office international 大雜英に譯して國際保健局が設けられてゐることを知り、之か戰後細々と生存してゐる故、之を用ひたならば一番造作があるまい。國際聯盟が新に衛生機關を設置することは、金の懸る事でもあり、又直ちに協力事業を赤十字社に依囑することも、目的の根本に差異があるのだから出來ない。故に Office international に頼むのが最も捷徑であらうといふので、斯ういふ意見で理事會に廻付した。其時他の事柄とは違つて人命及び健康に關する事であるから Office international の當局が喜んで此の仕事を引き受けるであらうと思つて居つた。私は此の意見が譯けも無く通つて、寧ろ光榮とし、喜んで引き請けて來る事と思つて居つた所が豈に圖らんやなか〳〵さう簡單にはゆかない。

成る程これ程明瞭な目的を持ち、これ程私のない仕事に就いても國際の事となると國と國とが妬心を持つたり、或はそれに從事してゐる役員達が此方へ引張り、彼方へ引張りして、仲々容易に纏るものではないことを感じて、昨年國際聯盟事務局を去るに臨んで、私は總長に自白して謂つたのである。

「私が玆に就任して二ケ月程の間は、彼の問題に就いて、斯々の意見を提出したことは、貴方も御承知のことゝ思ふ。如何に私が愚であつたか彼の事を思ひ出すと赤面せざるを得ない。人情を知らぬと云ふか、朗かな問題である丈けに、何の躊躇もなく直ぐに通過すると思つて居つたが、其の考は全然裏切られたのであつた。彼の書類は、保存してあるけれども、其の書類丈は除綴して燒き棄てゝ仕舞ひたい。自分の迂愚を永久に記念するのは如何にも殘念である」。

と訴へたところ、總長は

「自分等はさういふことは、幾度も經驗してゐるから何んとも思はない。別に燒き棄てる必要もないではないか、却つて、君の純朴なところを現してよいではないか、まあうつちやつて置きなさい。」

といふやうな譯けで、永久に恥の記念を貽して歸つた譯けであるが、それ程に僅か九年以前に於いては、國際的協力が、衛生方面に於いては行はれてゐなかつたのである。

聯盟と赤十字同盟

然るにこれに先き立つて——國際聯盟創立の數ケ月前、未だ巴里に於いて講和會議が每

月開催されてゐるころ――南露西亞及び波蘭土の赤十字の派遣員から、至急電報やら手紙やら、或は使者迄も講和會議に送つて、戰は濟んだが、「コレラ」、「チフス」、痘瘡其の他ありと凡ゆる惡病が大流行してゐる。講和會議で此の人道問題を何んとか解決して呉れ、列國の政府が金を醵出し合つて、此の不幸な人々を救濟して呉れ、と云ふ事を日に幾度となく訴へて來る。此の爲に講和會議では、そこで金を募集して救濟すると云ふ簡單に事を運ぶ譯けにはゆかぬ。此場合最も相應しいのは又望しいのは赤十字社の活動であるが、此の時はもう御承知でもあらうが、赤十字社が二つに分裂して居つた。

從來の（一八五〇年創立）ジュネーヴに創立された Comite international は、今日でも矢張り存在してゐる。恰度昨日（四月一日）の外國電報の報ずるところによれば、其の委員長であるアドール――といふ人が八十二歳の高齢で死んださうである。此のアドール氏は創立以來其の會の爲めに努力した人で、昔つては瑞西の大統領をもやつた人傑であつた。而して此の Comite international は中立國が主となつて創立した會であつたが爲めに、瑞西が主唱者であつたから、各國と交渉する時は頗る都合がよいけれども、事業を實行するには如何にも間に合はぬので、此の Comite の他に League of Red Cross Societies なるものを戰爭中同盟國丈けで創立した。此の創立に關與した國は、英國、佛蘭西、米國、日本等が主なるものである。

斯くて新に出來た赤十字同盟なるものと、從來よりあつた Comite なるものとが漸次緣が遠くなり、此頃實際活動して居つたのは、同盟の方である。露西亞、波蘭土等に於いて今述べた流行病蔓延の急場を救つて居つたのも此の方であつた。講和會議に屢々電報を打つて、救援を求めたのも此の方である。これは亞米利加の後援で行つたのであるから巨萬の資金を擁して居た。幾何費消したか判明せぬけれども、恐らく五六千萬圓は費したらしい。國際會議に於いても、亞米利加を動すにあらざれば到底何百萬といふ金は集りさうもなかつたので、國際會議では手の付けやうがなかつた。故にそれは赤十字で行つてくれといふので實際の手を下さなかつた。（未完）

隨筆種痘（十）

澤　式

十二、酒湯

酒湯（さゝゆ）と云ふ一の儀式？がある、

「酒湯ハ本邦何レノ時ヨリ行ハル、ヤ未考」―『叢桂亭醫事小言』―

痘疹發症後十二日に行ふのが一番湯、十五日目に行ふのが二番湯と云ふさうです。酒湯には根源由來の有る事でせうが

「役ノ行者ノ淨瑠璃ニ酒湯ノ創リノコトアリ」―『同上』―

其の戲曲が巢林子の作に係る物か出雲の作か知らないから見る由が無かつた。併し夫れは「虛談ナリ」と云ふ事です。

酒湯の遣り方は『護痘錦囊』に詳しく見えてゐます。その全文を鈔出致します。

「酒湯の流式、

酒湯（さゝゆ）の式は然るべき座敷の中央に毛せんを布き痘者毛せんの眞中に居り掛りの者木地の盥へ、小豆鼠の糞酒と湯を合せたるを入れ持ち出で痘者の左りの後ろの方へ置き今一人は狹俵を三寶に載せ持ち出で痘者の右の後の方よりかざす、又一人はくま笹か疱瘡神の左の後の方より盥の酒湯をしめし水をきりそゝぎかくるまねをすること三度にして終る、夫れより匙を取る者診ひみて本の寢所に入りて平服に成り此時諸人賀を述る云々」

「衣類はいづれも赤の無紋なり、或は男女醫者とも麻上下十徳かいどり下げ帶等の上へ紅麻の單のうは襲して同じ男帶をする也。其調度は木地の盥一つごふんにて鶴龜松竹を畫かく同手桶二畫同じ一は湯一は酒を入る杉の五合枡二本同八寸水漉し、三寶一つさん俵一くまゞ三本水引にて本を一つに束ね赤小豆鼠の糞十二、て右の盥へ湯と酒と和ぜたる―湯一手桶に酒一枡約―を次の間より持出て、又三寶にさん俵を載せその上にくまゞ右の二種を紙に包みのせて持出て赤小豆鼠の糞を盥の内へ納れ酒湯を掛く云々」―

酒湯で想ひ出すのは岡本啓廸院――玄冶――のことです。三代將軍家光が酒湯のをり、將軍御乳人といふので當時柳營に飛ぶ鳥を墮してゐた彼れ春日局を玄冶がいたしめた事です。

將軍も竹千代時代に、黑鯉の御湯まで遣つたにも拘はらず、元和九年關外の任を襲ふてから五年目恰度年齒二十五の折、寛永五年富士山噴火の翌る年に疱瘡を患はれたのです。

「御疱瘡正に重らせ給ひける時（二位局）―春日局のことです―東照宮の御神前に詣で只今我君御難痘に在らせられ典藥も力盡て究らせ給ふ天下の將軍に任ぜられし大事の御身なり私が身もとより、汚穢不淨なりと雖も御乳味を奉りたれば願くは御身替りに立替らせん。此願成就して御快くましまさば私事病を受け苦惱を致し候とも醫を加へ湯藥を服すまじと丹誠をこらし願ひければ其忠誠の至極にや神感ましゝて俄に御痘色よくなり山をあげて漸くに御痘瘡になり御快然に至らせらる」―『明良洪範』、圖書刊行會板―

さうした難痘も無事に經過し愈々酒湯の式と成つた、ところが

「春日謂レ衆ニ曰ク酒浴之法ハ在ニ西土一所レ未レ聞レ之ヲ可ナラン矣」―『皇國名醫傳』淺田宗伯著―

素より局は其の道の者に命じ酒湯の事を相當調べさせたことであるかも知れぬ、其の上今は將軍自身さへ憚かつてゐる程權勢の局だから前には誰一人頭上げるものがない、

「衆莫レ答ヘ」

のありさま無理もない。

當時春日といつたら

「家光公位に就き給ひし後は公の覺へ殊に厚く前後の賜賚あげてかぞふべからず」―『德川太平記』小宮山綏介著、

といふ夫れのみか

「後水尾帝より特旨を以て四三條大納言實條卿の兄弟に准ぜられ御學問所に於いて春日局の號を給はり從二位に叙し同帝及明正帝より天盃を給はり東福門院より緋の袴を着するを許されたり」―『同書』―

であるから「衆莫レ答」も無理はないです。

然るに啓廸院玄冶のみおめず臆せず、

「西土無き所ニシテ而シテ本邦之ヲ行フ者モトヨリ多シ殁ンソ止ダ酒浴ノミナラン ヤ今關テ而シテ行ハザレバ是前古ノ嘉例モ一旦ニシテ廢絶ス可ナランカ且西土自ラ其事アリ意フニ君未ダ知ラザルノミ乃チ懷ヲ探リ一書ヲ取リ指シテ而シテ之ヲ示シテ曰ク請フ以テ惑ヲ解セト」―『皇國名醫傳』―

斯ういつたのです。但しこれだけなら阿附鼻息を伺ふ者でない以上は誰でも云ひ得るですが、玄冶はまだ夫れ丈けで口を緘しない、

「因テ大言シテ曰ク是等ノ事俗流ノ知ル所ニアラズ況シテ婦人ニ於テヤ」―『同書』―

と遣つゝけたのです、獨嘯庵のいはゆる「自非有確乎不拔之藻雜矣」といふがこれでせう。

善い氣持ちでしたらう、聞くだけで萬斛の鎦飲が下かつた樣な氣がする―、

「春日大ヒニ慚ヲ終ニ酒浴ヲ行フ」

といふことです。

そも〳〵此の玄冶法印は京都生れ曲直瀨正慶の門から出て、

「時十八元和之初叙法眼九年辭爲醫官後稱法印」

餘程の俊髦と見えます、日本橋住吉町附近に住んだとやら、多分玄冶店邊がそれだつたでせう。

「正保四年四月卒す、歲六十餘、麻布廣尾祥雲寺に葬る」―『名人忌辰錄』―

歿年が正保四年で六十餘歲といふのでは、家光が痘瘡をわづらつた寛永五年の酒湯一件頃は恰度四十六七であつたでせう、知命を過ぎて五六年口角全く黃ならず髮邊未だ白からず技能既に熟して思慮將さに明かなり、恰度良い年頃です。加旃玄冶はきかん氣の醫者らしいです、それが剃りたての圓頂を打ち振り爛々晨下の電なす眼を見張り、彼れ燃ゆるばかりの緋の袴を穿つた半百歲の春日を睥睨叱咤した有樣は、蕭としても蕭がらです。他日誰かの手を倩ふて丹青の技を煩させ度いと思ひます。

（昭和三、四、一二）